

※ 拔粹のため、

是非、全文を読んでいただきたく。

織田信長は五層七階の安土城を造る。

五階の不等辺「八角形」は京都・吉田神社の八角形の大元宮に見られるように、皇室の陵墓や神仏の畏敬空間などに見られる。また、その吹き抜け空間の構造には、西欧の吹き抜け、教会の空間をイメージし、唯一絶対の天主をイメージしていた。

★安土城のすぐ近くに御所の清涼殿の裏返しの邸を設置したといわれる。つまり、安土城に天皇の行幸を求め、安土城天守閣にいる信長は清涼殿の天皇を見下ろす構造になっていた。

信長は天皇を凌駕しようとした。
天守閣最上階に三皇は伏羲・神農・黃帝、
つまり古代中国の伝説上の三「天子」である。

「皇」は美しく大なること、「帝」は徳が天に合する意味である。最上階から信長は三皇と共に天下を見下ろし統治しようとした。しかも六階には儒教・道教の祖と高弟を描かせた。

「天守閣」か「天主閣」か。信長にとっては天空を守る存在であり、また、耶穌教の「天主」の意味も込めたのか。後

に信長自身を神の如く崇めんど、安土城内の「盆石」を礼拝させた。

	弘徽 殿上 御局	萩 戸	藤壺 上 御局	お湯殿 の間	お湯殿 の間	藤壺 上 御局	萩 戸	弘徽 殿上 御局		
孫庇	夜御殿			朝餉 間	朝餉 間	夜御殿			孫庇	
	昼御座			台 盤 所	台 盤 所	昼御座				
	石 灰 壇				鬼 の 間	鬼 の 間				
	殿上間									

安土城の本丸清涼殿

京都御所の清涼殿

※ 裏返しの間取り

御所の清涼殿の間取りを裏返して、
安土城に天皇を招き、天主閣から見下ろす。

公家の日記からみる

京の馬揃は信長の軍事的威嚇行為

『兼見卿記』天正九年（一五八一）一月二五日「夜に入り、惟任日向守（明智光秀）より書状到来。今度信長御上洛ありて御馬汰（馬揃えの沙汰）なり。御分国こと」とく罷り上るべきの旨仰せ付けらる。」

明智光秀から吉田兼見の許へ、今度信長が上洛し馬揃えを行うから、配下の將はことごとく上洛する旨の命令である。「公家衆も必ず参加せよ」との信長直々の命令であった。

六十五歳の正親町天皇に譲位を迫り、信長は天下に己の武威を示そうとした。

天正十年五月十五日、織田信長は徳川家康と穴山梅雪らを安土城に招いて歓待した。その馳走役は明智光秀であった。五月十七日、光秀は中國攻めの援軍を命じられ、安土から近江坂本城へ戻った。十九日、二十日、安土總見寺で信長は能を興行し、棧敷には信長以下、前久・家康・梅雪のほか、僧長雲・松井友閑・武井夕庵という信長の側近が陪席した。家康と梅雪は二一日入洛して、二九日和泉堺を見物した。

『岡本保望上賀茂神社興隆覚』「この時分は、みなみな子供まで泣き申し候に、上総殿（織田信長）の衆と申し候えば、子供泣きやみ申し候ほどに、恐がり申し候」織田信長とその家臣と言えば、子供も泣きやむほど怖がっていた。

『兼見卿記』天正十年五月二十九日　信長上洛

正本「信長御上洛お迎へのため、侍従を召し具し山科に至つて罷り出づ。雨降る。未の刻御入洛。お迎へ衆おのおの罷り帰るべきの由、先にご案内の間、すなはち急ぎ罷り帰るなり。」

改竄後「信長御上洛お迎へのため、山科に至つて罷り出づ。数刻相待つ、午の刻より雨降る。申の刻御上洛。お迎へおのおのの無用の由、先へお乱（森蘭丸）案内候間、急ぎ罷り帰りをわんぬ」

兼見卿記

吉田家は、吉田神道流の宗家。平安時代から吉田神社の祠官に任じ、地主吉田兼見の日記、十八冊。

吉田家は、吉田神道流の宗家。平安時代から吉田神社の祠官に任じ、地主吉田兼見の日記、十八冊。元龜元（一五七〇）年文禄元（一五九二）年を収める（矢年あり）。織田信長・豊臣秀吉の動静や織豊期の社会・文化の記事が豊富で、この時代の重要な史料。

※『本能寺の変』前日。光秀と親交の深い吉田兼見は、錚々たる参会衆なのに欠席。
予てより『本能寺』に近づくなと、言われていた。

信長の入洛した時刻を、前者では「未の刻（午後二時）」。後者は「申の刻（午後四時）」としている。信長と前久の話「「讓位と將軍宣下」の対話を隠すためである。この二時間のズレは近衛前久の事件関与を隠蔽するためである。兼見は「数刻相待つ」と「まかす」なぜか。

近衛前久は「明日、清涼殿で正親町天皇の譲位。一日には將軍宣下。未の刻参内。」

正親町（おおぎまち）天皇の譲位→誠仁親王即位→五宮（邦慶親王・信長の猶子）。

信長は誠仁親王を天皇に即位させ、さらに譲位させて、皇太子・五宮・邦慶親王はいざれ天皇に。すると、織田信長は「猶子の父」として太上天皇になれば、天皇制を凌駕できる。安土城清涼殿に天皇を迎える計画があり十二月に閏月を入れる暦の採択しようとした。近衛前久は、二月一日太政大臣になり、五月に辞す。太政大臣は「空位」であった。

三職推任（關白・太政大臣・將軍）。四月二十五日、勸修寺晴豊（三十九歳）と村井貞勝と話し合う。

『言經卿記』「六月一日「前右府（信長）へ礼に罷り向ひをはんぬ。見参なり。進物は返されをはんぬ。参会衆は近衛（前久）殿、同御方御所（近衛信尹）、九条（兼隆）殿、一條（内基）殿、二条（昭実）殿、聖護院殿、鷹司殿、菊亭（晴季）、徳大寺、飛鳥井、庭田、四辻、甘露寺、西園寺亜相、三条西、久我、高倉、水無瀬、持明院、予（山科言經）、庭田黄門、勸修寺黄門（晴豊）、……（略）その外地下少々これあり。」

五摶家以下公家は本能寺の信長に挨拶に出向いた。信長は「「践祚の儀大慶。」」信長は安土城から運ばした名物茶器三八種を見せびらかせた。数奇者の垂涎（すいせん）の品々。『日々記』に「天皇は無用、我こそが王であり、天皇は降りろ」と信長が述べたといふ。

※『日々記』

勸修寺晴豊の日記

『日々記』に、斎藤利三、山崎の合戦に敗れ捕縛。洛中引き回しの様子を見、

彼などは、「信長討ちの談合衆なり」と書き残す。

談合衆は、光秀、家康、藤孝、利三。いずれも清和源氏で、

信長は平氏。源氏にとって、再び平氏に天下をは、許せず。

※ 信長が天皇の上に立とうとした足跡

天正3年、いきなり権大納言兼右近衛大将。

4年、正三位内大臣。

5年、従二位右大臣。

6年、正二位。この年、全ての官職を辞退。

本能寺の変後、誠仁親王・兼見・勧修寺晴豊ら公家は集まり談合した。光秀に「安土城入城の祝賀」を伝えること。吉田兼見は、正親町天皇と誠仁親王の勅使として光秀の交渉にあたつた。七日、安土城で兼見は光秀に対面し、八日、光秀は誠仁親王に礼を奉上、九日、安土城などから奪つた財宝・銀子を携えて兼見宅を訪れ、「朝廷や京都五山などへ献

上されたい」とそれを兼見に預けた。天皇へ銀五百枚、五山へ百枚づつ、兼見に五十枚。それを兼見は禁裏に持参した。長橋局と勧修寺晴豊が天皇にそれを披露した。

備前高松城を囲んでいたはずの羽柴秀吉は有名な「中國大返し」で大坂に戻り、近江・山城を制圧した光秀軍と対峙した。迎撃準備中の鳥羽の光秀の陣へ、禁裏は銀進上の礼状を兼見に届けさせた。朝廷は光秀を「京の治安を申し付け」武力の守護者とした。つまり、

②「信長は朝敵であり、光秀は朝敵を討伐した英雄」と認定したわけである。

六月七日、近衛前久は息子の近衛信尹を訪れ、酒樽を進上し、晴豊も加わって盃をもられた。『兼見卿記』六月九日、明智光秀は吉田兼見宅で、連歌師の里村紹巴・昌叱・心前らと夕食した彼等は「愛宕百韻」の仲間であり、光秀は誠仁親王・勧修寺晴豊・兼見と一体であつた。

六月十一日、晴豊は祖父で前権大納言の勧修寺尹豊とともに東坊城家に出掛け、医師の半井通仙（らわん とうせん）・中納言の烏丸光宣が集まり、祝宴を開いて、大酒に酔い浸つた。

なぜ、京の公家は横死した信長の悲劇に哀悼の意を表さずに、祝宴を開いたのか。

六月十四日、山崎の合戦で敗れた明智光秀は、勝龍寺城（長岡京市）に入り、深夜わざかの家臣と城を抜けて坂本を目指したが、山科の栗栖で農民により殺害された。

六月十三日、秀吉と織田信孝が京都塔の森まで来た時、伝奉の勧修寺晴豊と広橋兼勝は雨と戦禍のなかで、正親町天皇と誠仁親王の勅使として「太刀」を渡した。秀吉と信孝二人は「一段はやばやとかたしけない」と馬から下りて太刀を拝領した。「天正十年夏記」。七日前「朝敵」信長を討つた光秀を賞賛した朝廷が、今度は「光秀」を朝敵とした。

※ 三職推任(太政大臣・関白・征夷大將軍)

『本能寺の変』直前の5月4日、勧修寺晴豊ら天皇の使者が安土城に来る。

『いかようの官にも任せられ』との意向をもって。

信長は勅使の趣のみを確認し、面会せず。